

静嘉堂@丸の内 開館1周年記念特別展
「二つの頂—宋磁と清朝官窯」
2023年10月7日(土)~12月17日(日)

陶芸技術の粋を極めた中国陶磁の歴史上、二つの頂点といえるのが宋代の陶磁器と清朝の官窯磁器です。本展では「静嘉堂@丸の内」開館一周年を記念し、岩崎彌之助が明治期に蒐集した清朝官窯をはじめ、その嗣子・小彌太蒐集にかかる宋磁を精選し紹介します。

【開催概要】

- 会 期：2023年10月7日(土)~12月17日(日) ※会期中一部展示替えあり
- 会 場：静嘉堂@丸の内(明治生命館1階)
〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-1-1 明治生命館1階
- 休 館 日：毎週月曜日(ただし10月9日(月祝)は開館、10月10日(火)休)
- 開館時間：午前10時~午後5時(金曜は午後6時まで)※入館は閉館の30分前まで
- 入 館 料：一般1,500円 大高生1,000円 中学生以下無料
- 問い合わせ：TEL 050-5541-8600(ハローダイヤル)
- ホームページ：<https://www.seikado.or.jp>
- twitter：@seikadomuseum
- 主 催：静嘉堂文庫美術館(公益財団法人静嘉堂)

<本展3つのみどころ>

- ① 荘厳なる宋磁—中国陶磁史の古典(クラシック)を味わう
- ② 豊饒なる色とかたち・清朝官窯
—磁器(チャイナ)の国の最高峰・皇帝のやきものを味わい尽くす
- ③ 見せます! 曜変「稲葉天目」のすべて

<関連イベント>

キュレーターズ・ダイアログ「中国陶磁の魅力語る」

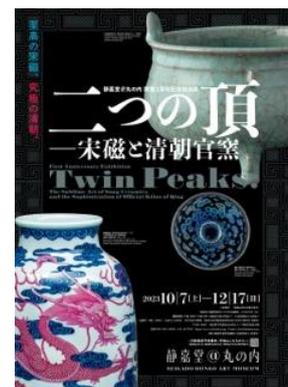
出光美術館学芸課長・徳留大輔氏をゲストにお迎えし、本展担当学芸員の山田正樹と、静嘉堂コレクションの中国陶磁や中国の窯址発掘・研究の最新情報について熱く語ります。

[日時]11月12日(日)14時~

[会場] 明治安田ヴィレッジ 明治安田ホール丸の内(明治安田生命ビル低層棟4F) [定員]150名

[参加費]無料(但し当日の入館券が必要)

※参加方法詳細は当館ホームページでお知らせいたします。



① 荘厳なる宋磁—中国陶磁史の古典(クラシック)を味わう

さまざまな産業や技術、そして市場経済と物流が発達した中国・宋時代、窯業技術も発展、生産力が拡大し、各地に多様な陶磁器を焼く生産地が出現しました。そうした宋時代の陶磁器のなかでも、美術的に優れた作品を「宋磁」と称しています。中国史上初めて、宮廷内で用いるために政府直営の窯で作られた官窯の青磁や、歴代の文人たちに愛され珍重された定窯の白磁、庶民たちの多種多様な需要に応じて装飾・器種ともヴァリエーション豊富な磁州窯系の陶器など、のちの時代に影響をのこした古典ともいうべき作品が生み出されました。

静嘉堂の宋磁の多くは、三菱第4代社長の岩崎小彌太(1879~1945)が大正~昭和初期に蒐集したもの。古くから日本に茶道具などとして伝来した宋磁に加え、20世紀初頭、新たに中国大陸より出土した作品があり、本展では、世界的に知られる名品をはじめ、国宝1点、重要文化財3点を出品いたします。奥深い青磁の青緑色、象牙のような白磁の質感、磁州窯系陶器の楽しい吉祥文様と素朴な味わいをお楽しみください。



広報画像 1

重要文化財《白磁刻花蓮花文輪花鉢》定窯
北宋~金時代(12世紀)

華北随一の白磁の名窯・定窯(河北省)の鉢。花形に刻みをつけた胴部の内外に流麗な蓮花文を彫り込む。江戸時代以前に日本にもたらされた作品と思われ、加賀藩主前田家に茶の湯の水指として伝来した。



広報画像 2

《白地黒掻落牡丹文枕》磁州窯
北宋時代(12世紀)

磁州窯は、有色の素地に白泥を化粧掛けする「白化粧」の技を基本に、多種多様な装飾を施した陶器を生産した。この枕は、白と黒の化粧土を重ね掛けして黒い化粧の文様以外を薄く削り落とし、強い色彩の対比により文様を表現する。牡丹の花は「富貴」、枕の形の「如意頭形」は意のままになることを意味する吉祥のデザインである。



広報画像 3

《青磁鼎形香炉》南宋官窯
南宋時代(12~13世紀)

宮廷専用の陶磁器を焼く窯を官窯という。南宋時代の官窯は首都・杭州(浙江省)に置かれ、青く澄んだ青磁の器が焼かれた。古代青銅器の鼎の形を模した重厚な造形で、明るい青緑色の釉薬には特徴的な貫入(釉薬のひび)が走っている。

広報画像 4



重要文化財《油滴天目》 建窯
南宋時代(12~13世紀)

茶葉の生産地にも近い福建省の建窯では、宋代に生まれ日本の茶の湯の源流となった喫茶法「点茶法」に適した黒釉の茶碗が作られた。なかでも黒釉に含まれる鉄分が焼成中に変化して出来る「曜変」や「油滴」は希少で珍重された。この油滴の見事な大碗は大阪・藤田家旧蔵で、古くから日本に伝わったものと思われる。

広報画像 5



重要文化財《青磁貼花牡丹唐草文深鉢》 龍泉窯
南宋~元時代(13世紀)

浙江省南部の龍泉窯では南宋時代に「粉青」と呼ばれる半透明で青緑色の美しい釉色を生み出した。龍泉窯の青磁は国内需要とともに海外での需要も高く、日本には多くの名品が輸出され伝わっている。本作は大坂の豪商・鴻池家に水指として伝わった名品。

② 豊饒なる色とかたち・清朝官窯

—磁器(チャイナ)の国の最高峰・皇帝のやきものを味わい尽くす

中国最後の王朝となった清朝では、康熙 19 年(1680)、中国最大の磁器産地である景德鎮に「官窯」が復興され、宮廷で用いる磁器の生産がはじまりました。官窯には運営を管理し、ときには製品のプロデュースを行う「督陶官」が北京から派遣され、技巧を駆使した完璧な磁器が次々と生み出されました。清朝官窯の最大の特徴は、清朝以前に登場したさまざまな名陶を詳細に研究することによって、精巧な「写し」を作ることができ、さらに清朝になって開発したさまざまな釉薬の技術や創意も加え、新たなデザインの作品を生み出したことでしょう。清朝官窯は、康熙・雍正・乾隆の三代(1662~1795)にわたって発展、最高潮を迎えます。さまざまな色彩の絵具を用いた絵画のように細密な表現の絵付け、精巧な意匠と自在な造形が、陶磁器のうえで可能となり、技術・意匠の両面で頂点を極めました。

世界各地に所蔵される清朝官窯磁器の多くは、辛亥革命(1911年)以後に国外へ流出したものの。しかし静嘉堂の創設者・岩崎彌之助のコレクションには、19世紀後半に英国人で日本美術の研究などで知られる F. プリンクリーによって蒐集された清朝官窯磁器が含まれています。世界的にみても清朝官窯の蒐集として、最も早い時期に開始された現存最古級のものといえ、嗣子・小彌太蒐集の優品を加え、まさに日本を代表する清朝官窯磁器のコレクションとなっています。

広報画像 6



《五彩百子図鉢》「大清康熙年製」銘 景德鎮官窯
清時代・康熙年間(1662~1722)

たくさんの唐子がたわむれ遊ぶ「百子図」は、多くの男児に恵まれることを願った吉祥のデザイン。鮮やかな赤地に多色の上絵付と金彩に彩られた子どもたちは、一見おとなのマネをして遊んでいるように見えるが、実は立身出世を意味するモチーフがちりばめられている。



広報画像 7

《五彩万寿桃文盤》「大清康熙年製」銘 景德鎮官窯
清時代・康熙年間(1662～1722)

皿の見込には長寿の果物である桃の実が大きく描かれ、中央に金彩で「萬壽」の文字が記されている。この皿は皇帝の誕生祝「万寿節」の際の祝宴のために用意された什器のひとつ。明代以来の上絵付技法である「五彩」の絵具を駆使して、果実のグラデーションとやわらかな質感を表現した秀作。



広報画像 8

《豆彩翠竹文碗 一对》「大清雍正年製」銘 景德鎮官窯
清時代・雍正年間(1723～35)

豆彩は下絵付の青花に淡い緑を主体とした上絵付を併用する技法。明代成化官窯の作が名高く、清朝では康熙年間にその模倣が盛んに行われた。厳寒期に緑を失わない竹は、高潔さの象徴として文人たちに愛されてきた意匠。純白の薄い磁肌に繊細な青花の輪郭線と清澄な緑の上絵具で翠竹図を描いた本作は、雍正官窯が作り上げた独自の作風といえるだろう。



広報画像 9

《茶葉末双耳壺》「大清雍正年製」銘 景德鎮官窯
清時代・雍正年間(1723～35)

古代青銅器の壺の形に倣った扁平な大壺。茶葉末は鉄分によって呈色する濃い緑色の釉薬で、雍正官窯の本作は緑青に覆われた古銅器か、あるいは細かな斑のある古玉器の色調をイメージしたものだろう。



広報画像 10

重要美術品《青花臙脂紅龍鳳文瓶 一对》
「大清乾隆年製」銘 景德鎮官窯
清時代・乾隆年間(1736～95)

清朝官窯の陶芸技術が極致に達した乾隆年間の技術力を示す逸品。たなびく雲の中に五爪の龍が体をくねらせ、また別面に鳳凰が羽ばたくさまを表し、一对で龍鳳がそれぞれ向かい合うように描いている。酸化コバルトによる青花の雲は、金を使った高価なピンク色の上絵具・臙脂紅による龍鳳をあらかじめ避けて描いているが、仕上がりには寸分の狂いも見られない。



広報画像 11

《粉彩梅花喜鵲図象耳瓶》
「大清乾隆年製」銘 景德鎮官窯
清時代・乾隆年間(1736～95)

清朝宮廷の工房が西洋の七宝焼の釉薬をヒントに開発した上絵付・粉彩は、白をベースにさまざまな中間色の表現が可能で、中国陶磁の絵付けが絵画的で繊細な表現に進むことを促した。本作は吉報をもたらす鵲(カササギ)が梅の枝にとまる「喜上眉梢」(喜ぶ気持ちが眉に表れる)の吉祥図を表し、また象頭の耳を添えた大型の瓶であるため「太平有象」(天下泰平)を意味する、吉祥性にあふれた意匠である。

③ 見せます！曜変「稲葉天目」のすべて

中国陶磁の至宝とうたわれる曜変天目。完全な形で現存する3点はすべて日本にあり、国宝に指定されています。なかでも江戸時代に徳川将軍家から淀藩主稲葉家に伝来し、現在静嘉堂が所蔵する「稲葉天目」は、曜変の特徴である光彩がもっとも華やかなものといわれています。本展では、「稲葉天目」に添えられた天目台(尼崎台)や収納箱をはじめ、伝来の証であるさまざまな付属品をともに展示し、“稲葉天目のすべて”を一挙公開します！



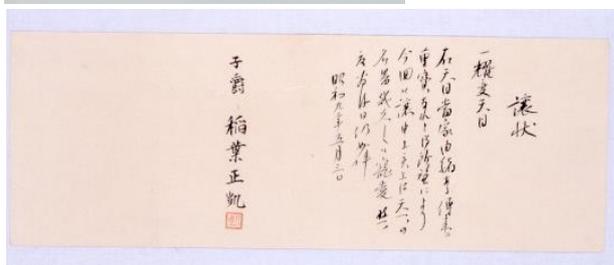
広報画像 12-1

《曜変天目(稲葉天目)および尼崎台》
南宋時代(12~13世紀)



広報画像 12-2

国宝《曜変天目(稲葉天目)》建窯
南宋時代(12~13世紀)



参考画像 1
稲葉家当主・子爵稲葉正凱からの譲状
昭和九年五月三日



参考画像 2
曜変天目 旧袋
(明時代「紺地二重蔓牡丹唐草文金地金襴」)と旧内箱



参考画像 3
曜変天目 現袋(明時代「白地雲文金襴」)と現内箱

【報道に関するお問い合わせは】

◆静嘉堂文庫美術館 広報事務局(共同 PR 内 担当:三井)

※在宅勤務も増えているため、メールでいただけると助かります。

E-mail:seikado-pr@kyodo-pr.co.jp / TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地 1-13-1 銀座松竹スクエア 10F

◆静嘉堂文庫美術館 E-mail:press@seikado.or.jp(広報担当:大森)